名著に学ぶ経営～その７：経済学書に学ぶ

経済学というと統計などを多く用いたものも多いが、私が読むのは本当に古典といわれるものだけである。しかも目次を見て自分の経営に関わるような部分を拾い出して読む。まずはアダムスミスの「国富論」。最初に出てくる分業の話はモノづくりの基本である。ピンを製作出来るのは普通の人なら一人で１日１本、ベテランでもせいぜい２０本であるという。しかし１０人が分業して行うなら４万８千本、つまり２４０倍ないし４８００倍の効率が挙げられたというのである。私の会社で行っているＮＣ機械作業、ろう付け、メッキ作業も一人の作業者が通して行ったら、どれだけ効率が悪いことか。管理、営業、製造といった分業は更に有効であり、規模の拡大に応じて細分化していく必要がある。また有名な「見えざる手」というものも、経営をやっていると時折実感する。それぞれの社員が自分の収入を上げるために一生懸命働けば、結果的に会社の売上、利益が上がり、すべての社員に恩恵が回ってくるのである。「見えざる手」を経営者が担うべき時もある。それぞれの社員の要望を受け入れつつ、それが売上や利益につながるように持っていくのも、経営者の手腕である。マルクスの「資本論」も目次を見ると、「労働日」「賃金」「機械装置」など非常に身近な問題が出てくる。１日６時間働くことができれば自分の食い扶持くらいは稼げるのに、資本家が８時間、１０時間、１２時間と労働時間を増やし、その分を搾取しているというのである。しかし現在は当時と事情が全く異なる。労働基準法などがしっかり整備され、所定労働時間以降は時間外手当が支払われる。働きの悪い社員などは逆に会社から搾取しているくらいだ。又、労働者が機械に取って代わられるという問題も述べられるが、機械が登場すればその開発、製造、保守などの仕事も発生し、新たな労働力が必要となる。その後のオートメーションや現代のＩＯＴになっても事情は変わらない。ニーズがあれば仕事が生まれる。さらに、資本家を倒して労働者の国を作るなどと言っているが、ソビエト連邦など見ての通りだ。ある程度国がコントロールする事もできるし、経営者の良心で解決することもある。マルクスが向けた労働者への同情は有難いが、彼が心配したほど、世の中は悪くない物であった。２０世紀に入るとケインズが有名であるがこれは国の施策を中心としたものである。我々経営者にとってはもう一人の巨人シュンペーターの方が身近である。今では日常語られるイノベーションという言葉もこの人あたりから広まったものである。当初は「ニューコンビネーション＝新結合」という用語であったが、新しい財貨、新しい生産方法、新しい販路の開拓、原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得、新しい組織の実現という５つの場合を挙げている。また、景気循環についても述べられ、不況の発生原因から進行過程、対処法まで言及している。のちに発生原因や長さに応じキチンの波、ジュグラーの波、クズネッツの波コンドラチェフの波など様々な景気の波の名称も現れたが、これらの波は将来も何十年、何百年に渡って続きそうだ。景気の良い悪いに一喜一憂せず、春夏秋冬、或いは朝昼夕晩それぞれにやるべきことがあるように、景気の良い時悪い時に適切に行動すれば済むだけの事である。これらのように、経済学の古典を知ると、大局的な観点から経営判断ができる。